様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６６１

研究課題名（和文）多言語社会台湾の日本語人ナラティブに見られる言語混用と日本語人フレーム調査の試み

研究課題名（英文）Japanese Narratives in Taiwan's Multilingual Society-A Trial of Inter-lingual and "Nihongo-jin" Frame Research

研究代表者
谷口　龍子（TANIGUCHI, Ryuko）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授

研究者番号：２０５７０６５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：台湾在住の日本語使用者（日台国際結婚家庭のバイリンガル国際児、日本統治時代に日本語教育を受けた先住民など、以下日本語人）のナラティブ・データを収集、日本語と中国語、台湾語、原住民言語の使い分けや混用に見られる言語構造的特徴から、日本語人の日本語使用（或は不使用）意識やアイデンティティについて談話分析の理論により分析した。その結果、現地の社会で人々と良い関係性が保たれている者ほど日本や日本語意識が顕著に見られないことが明らかになった。また、日台と日豪のバイリンガルを比較したところ、その言語の持つ歴史的、社会的、経済的、文化的なパワーの強弱が言語使用と大きく関連していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日台バイリンガルや日本統治世代の人々のナラティブ・データを、心理学や談話分析で使われるポジショニング理論により分析することにより、日本や日本語の意識がどのような形でアイデンティティ形成に影響を及ぼしているかという点について明らかになった。ポジショニング理論とは、語り手が自分をどのような位置づけにおいて話を進めているかを分析するものである。自分がどのように見られたいかという意識を解明することで、バイリンガルのアイデンティティ形成の要因や葛藤を知ることができた。グローバル化社会における多言語多文化理解という点で本研究成果の社会的意義は少なくないと思われる。

研究成果の概要（英文）：This research collects narrative data from Taiwan-based Japanese users (bilingual international children of Japan-Taiwan international marriages, indigenous people who received Japanese language education during Japanese rule, etc.) and analyzes the consciousness of Japanese language use (or nonuse) and identity of Japanese people from linguistic structural features found in code-switching between Japanese, Mandarin and Taiwanese, as according to Discourse Analysis Theory. As a result, it was shown that those who maintain good relationships with people in the local society have less Japan and Japanese awareness. In addition, when comparing Japan-Taiwan and Japan-Australia bilinguals, it was found that the historical, social, economic and cultural power of the language is strongly related to language use.

研究分野：語用論　談話分析　社会言語学

キーワード：日台バイリンガル　アイデンティティ　ナラティブ・データ　談話分析　ポジショニング理論　言語とパワー

１．研究開始当初の背景

本研究の前身となった基盤研究Ｂ（2011 年～2014 年）では、主に台湾に在住する日本統治世代の人々や日台国際結婚家庭の聞き取り調査を行った。複数の調査協力者に聞き取りを行う過程において、調査協力者が台湾在住に至るまでの背景や家庭環境等により、日本や日本語への認識に相違が見られることがわかった。その相違は言語能力の高さとは関係なく、現地において、自分自身をどのような位置づけで捉えているかという点の相違であることが推察された。そこで、調査協力者のナラティブ・データをポジショニング理論により分析することが効果的であると考えた。

２．研究の目的

1) 台湾在住の日本語使用者（日台国際結婚家庭のバイリンガル国際児、日本統治時代に日本語教育を受けた先住民など、以下日本語人）のナラティブ・データを収集、日本語と中国語、台湾語、原住民言語の使い分けや混用に見られる言語構造的特徴を談話分析の理論により分析することにより、日本語人の日本語使用（或は不使用）意識やアイデンティティを探ることである。
2) 言語間の力関係（歴史的、社会的、経済的、文化的など）が言語使用や言語保持にどのような影響を及ぼしているかについて解明する。

３．研究の方法

上記 2.研究目的の 1)については、台湾在住の日本語使用者（日台国際結婚家庭のバイリンガル国際児、日本統治時代に日本語教育を受けた先住民など、以下日本語人）に聞き取り調査を行い、録音、文字化する。複数の言語が使える調査協力者からはそれぞれの言語によりほぼ同じ内容の聞き取りを行う。調査データからナラティブ・データを取り出し、談話分析を行う。具体的にはポジショニング１～３の段階に応じて発話のコーディングを行い、分析する。言語毎の異同について分析する。

上記 2.研究目的の 2)については、日本とオーストラリアの国際結婚家庭に生まれた国際児のナラティブ・データを収集し、日台バイリンガルと比較対照を行う。

４．研究成果

本研究の調査において、研究成果が顕著にみられたのは、台湾在住の日台バイリンガルの若者（いずれも台湾人の父親と日本人の母親を持つ）3 名のナラティブ・データの分析結果である。3 名とも日本語能力が高く、日常会話に支障はないレベルである。また、小学 5 年生と中学の歴史の授業で、台湾の日本統治時代について学んだ際に、少なからず教員やクラスメートと何らかの軋轢が生じた点で共通している。

上記 3 名に対して 2016 年から 2018 年にかけて、各人に対し 2~4 回、それぞれ総計 3 時間～10 時間前後インタビューを行い、収集、文字化したナラティブ・データをポジショニング理論により分析した。その結果、以下の点が明らかになった。

3 名のうち 2 名は、現地の台湾人のクラスメートや仲間と摩擦を起こしてうまくやっていけ

ない日台バイリンガルのクラスメートの例を挙げることで、自分を現地の学校で突出することなく、うまく折り合ってやっている日台バイリンガルとして位置づけている。その一方で、日本語ができるという特殊性を生かし、学内の対外的な行事で学校の代表者として活躍もしている。彼らは日台の国際児であるという立ち位置で今後も台湾で暮らすことを望んでいるが、母親の国である日本についてより知見を深めたいという要望もある。

一方、もう１名は、小学生、中学生の生活においてクラスメートからひどいいじめを受けた経験がある。彼は「自分は日本人である」と主張することにより、台湾の社会に受け入れられないことの理由付けをし、自分を納得させようとしている。同時に日本人を意識することで、台湾の社会における自分の位置づけを優位にしようとしている。日本においては帰国子女としてふるまうと言い、常に自分を優位な立場として置こうとする様子が窺える。

このように、台湾の社会での人間関係が安定しているかどうかによりアイデンティティの形成が異なる点が明らかになった。

また、調査を進めてゆく過程において、両言語間の力関係（歴史的、経済的、文化的）が言語習得や言語能力の状況に影響を及ぼしていることがわかった。

台湾には日本統治の歴史があり、日本文化もなじみがあることから、日本や日本語に触れやすい環境であると言える。また、日本語能力が就職に有利であることから実益目的としても日本語学習が行われ、日本語人にとって日本語能力の保持が容易な言語環境であると言える。

比較対照のフィールドとして、オーストラリアのメルボルンで日本人とオーストラリア人の間に生まれた若者 3 名にインタビューを行ったところ、いずれも日本語がほとんどできないか、あいさつをするなど片言程度の日本語能力しかなかった。オーストラリアでは日本語能力がビジネスなどの実益には必ずしもつながるわけではなく、日本語の学習意欲につながる強い動機が持ちにくい。日本や日本語に触れる機会も少なく日常的ではないことから継続的な日本・日本語意識も生まれにくく、日本語が現地において優位性を持たないことがわかった。

しかし、3 名のいずれも成長するにつれて、日本や日本語への興味が強くなり、たとえ日本語はできなくても片親が生まれ育った日本に行き、日本の社会や日本人と触れ合うことを願うようになったという。この点は日台バイリンガルと同様であった。

台湾原住民の研究については、ヤミ語の生会館や原住民の「なまえ」の由来についての調査が進み、研究成果の発展が見られた。

本研究に関連して、講演会（タイトル「言語の復権：Metroethnicity への視座」、2017 年 1 月 20 日）と研究会（タイトル「多言語社会 台湾の「日本語人」に見られる 言語混用と分析」2019 年 2 月 8 日）を開催した。講演会は、研究を始めるにあたっての方向性と展望を探るためのものであり、研究会は本研究の成果報告会である。いずれも 30 名～50 名の集客があり、研究内容や研究成果を社会に還元することができた。

今後は言語間の力関係と言語保持との関連について調査対象を広げる予定である。日台、日豪のバイリンガルと異なる言語間の関係性を持つ日本とフランスのバイリンガルも視野に入れ、研究を継続する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1．谷口龍子 「彼らはどのように理解されたいのか-日台バイリンガルのナラティブ分析試論」、『東京外国語大学論集』、査読無、98 号、東京外国語大学、2019 年 7 月発刊予定

2．森口恒一「言語の発生から見た台湾原住民の「なまえ」」『台湾原住民の姓名と身分登録』査読有、147 巻、2019

3．森口恒一「伝承と歌会儀礼から見たヤミ族の世界観：人の生誕と死後の再来」『台湾原住民研究』、査読有、22 巻、2018

4． 森口恒一「幻の「臺灣帝國大学」：伊能嘉矩の不思議」『台湾原住民研究』、査読有、22 巻、2018

６．研究組織

研究協力者氏名：森口　恒一
ローマ字氏名：MORIGUCHI Tsunekazu

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。